様式第４号（教員個人に関する書類）

教育研究業績書

令和５年５月１日

氏名　　森田久仁子

教育上の能力に関する事項		
事項	年　月	概要
１　教育方法の実践例		
(1)東南アジアの各大学と大阪大学の学生に対する合同インターンシップの引率及び指導	平成 25 年 8 月から平成 28 年 11 月の間（各回 2 週間）	インドネシア大学、マラヤ大学、デ・ラ・サール大学、カセサート大学、ハノイ工科大学、ヤンゴン工科大学の工学/人文系の学生と大阪大学の学生を対象とした、異文化融合、理系と文系の異分野融合、そして企業と大学との産学連携による海外インターンシップの企画・引率教員として、現地でプレゼンテーション、異文化コミュニケーション、異文化マネジメントに関する講義と指導を英語で行った。
(2)スカイプを活用した事前研修の導入	平成 26 年 10 月	異文化異分野融合型のインターンシップ事前研修として、デ・ラ・サール大学（フィリピン）の学生とスカイプをつなげ、自己紹介やお互いの文化の紹介を英語で行った。
(3)授業における YouTube ビデオの活用	平成 26 年 4 月から平成 27 年 3 月	Global Tourism, Time Management, Diversity Management など各回テーマを設定し、関連するビデオを視聴し、要約やディスカッションを英語で行った（大阪大学におけるグローバルキャリアデザインの授業）。
２　作成した教科書・教材		
(1)『文化人類学事典』日本文化人類学会	平成 21 年 1 月	「巡礼と場所」の項目を執筆した。
(2)『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』（共編著）御茶ノ水書房	平成 22 年 10 月	少子高齢化が進む社会において、高齢者を含むすべての世代の人々が心地よいと感じる生（ウェルビーイング）を協働で作っていくにはどうしたらよいか、フィールド調査に基づき論じた。医療人類学、看護学、死生学を学ぶのに適した教科書である。
(3)『文化人類学』医学書院	平成 23 年 11 月	医療人類学、看護学、死生学を専攻する学生のために作成された教科書である。『系統看護学講座　文化人類学』も別版として医学書院から出版されている。森田は第 5 章（pp. 130-155）の執筆を担当した。
(4)「インターンシップの事前研修で用いる教材の開発」	平成 25 年 8 月	東南アジアに進出した日系企業で実施するインターンシップ用の教材「日系企業のビジネスマナー」「日本企業の経営理念」「企業の社会的責任 CSR とは何か」「5S とは何か」「品質管理サークル」の英語版を作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 授業評価アンケート		授業評価アンケートでは、特に「授業に対する教員の熱意」や「説明の分かりやすさ」「質問に対する対応」「総合的な満足度」で高い評価を得ている。

様式第４号（教員個人に関する書類）

４　実務の経験を有する者についての特記事項		
【英語による授業】 東南アジアの６つの大学における講義	平成 25 年 8 月から平成 28 年 11 月	インドネシア大学等、東南アジアの６つの大学において、異文化コミュニケーションや異文化マネジメントに関する講義を現地大学生と大阪大学の学生を対象に英語で行った（上記 1(1)）。
・Global Career Designing（グローバルキャリアデザイン）	平成 26 年 4 月から平成 28 年 3 月	前期・後期各 2 単位。常勤（大阪大学）＊教授言語は英語
・Introduction to Social Sciences（社会科学入門） ・Topics in Humanities（人文学概論） ・Topics in Human Sciences（人文科学概論） ・Strategic Debate（戦略的交渉術） ・Effective Research Paper Writing（効果的な論文の書き方）	平成 28 年 4 月から平成 29 年 3 月	前期各 2 単位。非常勤（関西外国語大学） ＊教授言語は英語
【地域連携】 2017 年度甲子園大学公開講座	平成 30 年 3 月 14 日	講義題目「ショパンと過ごす地中海：レクチャーコンサート♪」
2018 年度甲子園大学公開講座	平成 31 年 2 月 25 日	講義題目「地中海をめぐる食と音楽の旅」
聖者・スーフィズム研究会	令和 2 年 7 月 7 日	講義題目「カトリックにおける聖人崇敬の射程」
上智大学研究機構イスラーム研究センター主催連続講演会「イスラーム及びキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち」	令和 2 年 12 月 7 日	講義題目「聖像も外出禁止：ロックダウン下におけるマルタ島カトリックの新たな日常」（オンライン）
2020 年度甲子園大学公開講座	令和 3 年 2 月 22 日	講義題目「地中海マルタ島の教会と聖遺物をめぐる旅」
甲子園大学オープンキャンパス講座	令和 3 年 9 月 5 日	講義題目「おうち時間を味わう～食＋映画×世界の珈琲～」
2021 年度甲子園大学公開講座	令和 4 年 2 月 19 日	講義題目「南欧の冠婚葬祭と食卓を囲む人々」
甲子園大学オープンキャンパス講座	令和 4 年 9 月 5 日	講義題目「地中海地域のお菓子の世界♪～スイーツ当てクイズ×世界の珈琲」
宝塚市「たからの市」講座	令和 4 年 10 月 9 日	講義題目「世界のコーヒー：地中海のカフェレストランとスローライフ」

様式第４号（教員個人に関する書類）

５　その他 特記事項なし		
職務上の実績に関する事項		
事項	年　月	概要
１　資格，免許 ⑴ TOEIC 公開テスト ⑵ 日本英語検定「1 級」	 平成 24 年 7 月、9 月 平成 27 年 11 月	 990 点（満点）取得 合格
２　学校現場等での実務経験 兵庫県立高砂南高等学校における出前講義	平成 29 年 10 月 24 日	講義題目「『常識』について考える：比較文化論の視点から」
３　実務の経験を有する者についての特記事項 「『カップリング』手法による実践型グローバル人材育成プログラムの構築」 「グローバル産学連携による人材育成プログラム（CIS）」 （助成研究） 科学研究費補助金「研究成果公開促進費」 科学研究費補助金「特別研究員（PD)奨励費」 科学研究費補助金「若手研究（B）」 大阪大学GCOEプロジェクト費（学内競争的資金） 科学研究費補助金「基盤研究（B）」「少子高齢・多文	 平成 28 年 1 月 平成 28 年 9 月 平成 15 年 平成 16 年 4 月から平成 19 年 3 月 平成 20 年 4 月から平成 23 年 3 月 平成 20 年 4 月から平成 24 年 3 月 平成 21 年 4 月から平成	 文部科学省特別経費プロジェクト広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業第 3 回シンポジウム「グローバル活動における多様な知の“協奏”と“共創”：人材の育成及び活用をめぐる各界の動き」において、異文化協働、文理協働、グローバル産学連携の 3 つの視点から海外インターンシップの意義を整理し、発表を行った。 平成 28 年度大阪大学ＦＤフォーラムにおいて、大阪大学における大学院教育の未来を考える」の国際教育部門の代表として、グローバル・リーダシップ力の養成を担う教育に関し、海外の企業や大学と共に取り組むためのプログラム開発について発表した。 すずさわ書店から単著『「聖女」信仰の成立と「語り」に関する人類学的研究』を出版した。 研究代表者として、「カトリック・ファンダメンタリズムとマリア崇敬運動に関する人類学的研究」と調査を行った。 研究代表者として、「南ヨーロッパにおけるエヴァンジェリカルとカトリック・ファンダメンタリズムの展開」に関する調査研究を行った。 研究プロジェクトの代表者として、「地中海地域におけるトランスナショナリティに関する人文学的研究」を組織し、共同研究を行った。 連携研究者の一人として、南欧の福祉、及び、ぽっくり信仰に基づく巡礼に関するフィールドワークを

化社会における福祉・教育空間の多機能化に関する歴史人類学的研究」	24 年 3 月	行った。（研究代表者：鈴木七美教授、国立民族学博物館）
京都大学共同研究 個別ユニット研究	平成 25 年 4 月から平成 27 年 3 月	研究プロジェクトの代表者として、共同研究を組織し、「南欧カトリシズムの変容と福祉ビジネスの展開に関する地域間比較」に関するシンポジウムを開催する等、調査研究を行った。
科学研究費補助金「基盤研究（B）」「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究	平成 24 年 4 月から平成 27 年 3 月	共同研究の連携研究者の一人として、あらゆる人々が心地よく暮らしていけるためのコミュニティの構想をテーマに、人のウェルビーイングや他者との関係の紡ぎ方について研究を行った。
科学研究費補助金「基盤研究(C)」「グローバル人材育成に向けた宗教人類学的知識の活用に関する研究」	平成 27 年 4 月から平成 31 年 3 月	研究代表者として、経営学的なダイバーシティ・マネジメント論と人類学的な多文化理解のアプローチを接合するための研究を行った。
科学研究費補助金「基盤研究（B）」「地中海周辺域における聖者・聖遺物崇敬の人類学的研究」	平成 28 年 4 月から平成 31 年 3 月	共同研究の研究分担者として、地中海マルタ及びイタリアの聖遺物崇敬の調査研究を担当した（研究代表者：赤堀雅幸教授、上智大学）
科学研究費補助金「基盤研究（A）」「イスラームおよびキリスト教の聖者・聖遺物信仰の人類学的研究」	平成 31 年 4 月から令和 6 年 3 月	共同研究の研究分担者として、地中海マルタの聖者・聖遺物崇敬の調査研究を担当。フィリピンにおける共同調査も平成 31 年度に実施した。
科学研究費補助金「基盤研究(C)「聖なるモノをめぐる宗教実践の現代的展開：加工技術と廃棄法の変化への着目」	令和 3 年 4 月から令和 6 年 3 月	研究代表者として、民衆カトリシズムにおける宗教実践について、聖なるモノの生産から消費、さらに廃棄に至るプロセスの分析を行っている。
大学共同利用機関法人人間文化研究機構「機関拠点型基幹研究プロジェクト」「グローバル地中海域研究」	令和 4 年 4 月から令和 10 年 3 月	共同研究の研究分担者として、南ヨーロッパ（イタリア・マルタ）の表象/イメージの形成過程と現代的動態の調査研究を担当している（研究代表者：三沢伸生教授、東洋大学）。
（共同研究） 「複数文化接触領域の人文学」	平成 18 年 4 月から平成 22 年 3 月	研究代表者」田中雅一教授、京都大学人文科学研究所
「キリスト教文明とナショナリズム：人類学的研究」	平成 19 年 10 月から平成 22 年 3 月	研究代表者：杉本良男教授、国立民族学博物館
「ライフデザインと福祉(Well-being)の人類学：多機能空間の持続的活用に関する研究」	平成 20 年 4 月から平成 21 年 3 月	研究代表者：鈴木七美教授、国立民族学博物館
「ウェルビーイング(福祉)	平成 20 年 10	研究代表者：鈴木七美教授、国立民族学博物館

様式第４号（教員個人に関する書類）

の思想とライフデザイン」 「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究：物語からモニュメントまで」 「ケアと育みの人類学」	月から平成23年3月 平成22年から平成27年3月 平成23年4月から平成26年3月	 研究代表者：田中雅一教授、京都大学人文科学研究所 研究代表者：鈴木七美教授、国立民族学博物館
４　その他 特記事項なし		

担当授業科目に関する研究業績等

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要
総合英語１A 総合英語２A 総合英語３B 総合英語４B 総合英語（前期） 総合英語（後期） TOEIC　英語	（学術論文等） １．デイヴィット・チデスター『コンタクト・ゾーンにおける夢見：19世紀南アフリカのズールーの夢・幻視・宗教』（翻訳）	単	平成20年12月	『コンタクト・ゾーン』、京都大学人文科学研究所人文学国際研究センター	pp.1-22	文化接触による夢見の解釈の変容について、19世紀のズールー社会を対象に論じた論文の翻訳を行った。
	2.“Coping with Anxiety in a Long-living Society: Elderly Japanese Pilgrims and Their Life Design for *Living Happily Ever After*”	単	平成25年2月	*The Anthropology of Aging and Well-being,* National Museum of Ethnology, Nanami Suzuki (ed.)	80:109-122	岡山県井原市にある「嫁いらず観音院」への巡礼を事例に、少子高齢化が進む日本のぽっくり信仰に基づく諸実践を取り上げ、多世代が交流し、互いをケアすることで構築される日本的な幸せと、英語圏において議論されるhappiness/well-being との違いにについて論じた。
	3.「フェロメーナ・キート『ファッション、フェティッシュ、ファケーレ』」（翻訳）	単	平成29年6月	田中雅一編『フェティシズム研究第3巻侵犯す	pp.249-274	フェティシズムは、日本では性的フェティシズムと宗教的フェティシズムの二つの視点から論じられることが多い。フェティッシュとしてのファッションを取り上げ、制作することの意味を問う本論文について、フェティシズム

				る身体』京都大学学術出版会		とフェティッシュの概念の刷新に資することを念頭に翻訳を行った。
	4.“Anxiety, Hope, and Enterprising Spirit: Refugees Arriving in Malta Via the Mediterranean Route”	単	令和 5 年 3 月	ORIENT	vol.58: 29-36	日本語の「共生」は英語に訳しにくい語である。Co-Existence では日本的なつながりや絆の含意を伝えることが難しい。本論文では、共生社会の実現という理想と現実の間について、マルタの難民の「記憶」の再編を手掛かりとしながら、Co-Designing という概念を導入し、新たな共生論の展開を試みた。
異文化コミュニケーション論	（著書） 1.『文化人類学［カレッジ版］』	共	平成 23 年 11 月	医学書院、波平恵美子編	pp.130-155（全 226 頁）	医療看護学や文化人類学を専攻する学生のために作成した教科書であり、『系統看護学講座　文化人類学』も別版として医学書院から出版されている。「人間と文化」、「文化人類学と質的研究」、「個人とコミュニティ」、「健康・病気・医療」「人間と死」などのテーマを取り上げ、文化の多義性や健康観を含む認識の多様性について医療人類学的視点から論じた。執筆者は波平恵美子、小田博志、仲川裕里、浜本まり子、藤原久仁子、道信良子の全 6 名である。藤原担当分は第 5 章「宗教と世界観」である。
	2.『シリーズ来たるべき人類学　第 3 巻 宗教の人類学』	共	平成 22 年 11 月	石井美保・花渕馨也・吉田匡興編、春風社	pp. 97-125（全 273 頁）	ムゼウムというマルタの宗教団体を事例に、彼らをめぐる名付けと名乗りに着目し、カトリック世界を対象にしたファンダメンタリズム研究と現地概念の齟齬を明らかにし、従来のファンダメンタリズム/原理主義研究に対する批判的検討を行った。執筆者は石井三保他 8 名である。藤原担当分は「『ファンダメンタリスティック』という選択：カトリック世界における名づけと名乗りと生き方のポリティクス」である。
	3.『叢書　コンフリクトの人文学　第 1 巻　コンフリクトから問う：その方法論的検討』	共	平成 24 年 3 月	小泉潤二・栗本英世監修、富山一郎・田沼幸子編、大阪大学出版会	pp. 17-32（全 196 頁）	人間が身体を持つように地蔵は石像という「身体」を持ち、人間との関係の中である特定の行為を要請するモノ/者として認識される。品川の願行寺の「縛り地蔵」の場合、信者は地蔵の首を取り外しそれを自宅に持ち帰ることができる。本論文では、聖なるモノと人間のアイデンティティの揺れ、及び自己の人生を託するモノ

						/者から見えてくる認識のあり様の変化について論じた。藤原担当分は「自己をめぐるコンフリクト論再考：モノ/者としての地蔵の身体性をてがかりに」である。
	4.『フェティシズム研究 2 越境するモノ』	共	平成 26 年 2 月	田中雅一編、京都大学学術出版会	pp. 155-180（全 493 頁）	本論文では、人と聖なるモノと奇跡に対する欲望の関係が「強い」からこそ、モノにまつわる伝説が反復的に変奏されること、そのモノが本物か偽物かをめぐる真正性の議論とは別の次元で、モノに関連した人や場所の聖性が生み出される点を論じた。
	5.『トラウマを共有する』	共	平成 31 年 3 月	田中雅一・松嶋健編、京都大学学術出版会	pp. 403-411（全 589 頁）	地中海ルートでマルタに辿り着いた難民申請者とその「苦難」と「不安」の意味の二重性について、緊急事態が常態化する日常と受け入れ団体（カトリック修道院）の思いとのすれ違いに着目し論じた。藤原担当分は「『ランペドゥーサの悲劇』後の苦難」である。
	6.『イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち』	共	令和 4 年 3 月	赤堀雅幸編、上智大学イスラーム研究センター	pp. 77-95（全 109 頁）	コロナワクチン接種の開始や教会再開後の社会変化について、現代マルタ社会を対象にモノの利用と認識の詩変化を中心に報告した。藤原担当分は、「聖像も外出禁止：ロックダウン下におけるマルタ島カトリックの新たな日常」である。
	（学術論文等） 1.「オーセンティシティの多様化論再考：秋田のカトリック巡礼地『聖体奉仕会』を事例に」	単	平成 21 年 3 月	『コンフリクトの人文学』大阪大学出版会	第 1 号：135-161	巡礼地において、多様なオーセンティシティが追求されたとしても、必ずしも意味のせめぎ合いや葛藤が起こるわけではないことを、秋田にあるカトリック修道院「聖体奉仕会」の事例を通じて示した。
	2.「巡礼地はどこにあるか：サイバーグレース時代における聖の場所性をめぐって」	単	平成 21 年 6 月	『宗教と社会』「宗教と社会」学会	第 15 号：23-41	日常/非日常を往還する行為として捉えられてきた巡礼に対し、マルタにおける感謝巡礼を事例に取り上げ、聖は日常の中に主観的に立ち現われては消えていくことを主張した。
	3.「主体化をめぐる複数の回路とトランスカルチュレーション：マルタにおける	単	平成 23 年 3 月	『コンタクト・ゾーン』京都大学人文科学	第 4 号：44-59	生政治や福祉国家の文脈で言及されることの多い司祭者権力であるが、本論文では、マルタにおける告解を事例に、従順な隷属主体とは必ずしもいえない、複数の主体形成が告解を通じて行われ

	告解の事例から」			研究所人文学国際研究センター		ていること、そして、それらの主体が及ぼすカトリック教義のトランスカルチュレーションについて論じた。
	4. “Rethinking Successful Aging: From the Perspective of Jizō with the Replaceable Heads”	単	平成 24 年 9 月	*Anthropology & Aging Quarterly*	33(3): 104-111.	品川の願行寺の「縛り地蔵」に対する高齢者の信仰実践を取り上げ、「サクセスフル・エイジング」研究における自立的個人の反モデル化として、高齢者イメージを再構築する必要性を論じた。
	5. “Customizing Places: Pilgrimage Sites, Holy Statues and the Moment of Connectedness in Contemporary Malta”	単	平成 25 年 1 月	*The Anthropology of Europe as Seen from Japan*, National Museum of Ethnology, Akiko Mori (ed.)	81: 169-181	つながりやきずな（日本）、ソシアビリテ（フランス）、the social（英語圏）であらわされる関係性について、「ネット巡礼」と物理的な移動をともなう巡礼を対比しながら、人々がつながりを感じる場所の所在を論じた。
	6.「現代カトリックにおける『邪悪なもの』の再定位：悪魔の領域としての邪視・占い・ニューエイジ」	単	平成 26 年 3 月	『キリスト教文明とナショナリズム：人類学的研究』杉本良男編、風響社	pp. 109-124.	現代カトリック文化圏における悪魔祓い（エクソシズム）の位置づけと意味の変化について、精神医学と宗教学の解釈を示した上で、本論文では特に地中海地域の文脈に照らしながら、「悪」の対象の転換により信徒の希望が創出され、信者数の増大を生み出している可能性を論じた。
	7. “The Rise of New Thoughts on the Evil Eye: Unevenly Shared Knowledge and the Daily Consumption of Religious Objects in Catholic Malta”	単	令和 5 年 3 月	『甲子園大学紀要』	第 50 号：23-32	マルタの悪魔祓い師の活動の幅が広がり、これまで迷信とされてきた信仰実践が悪魔の領域への参入行為であるとの認識が信徒間に高まり、その結果、悪魔にそそのかされて邪視を持つようになった点では被害者だが、他者に害を与える点では加害者であるという新たな知識が形成されつつある点を論じた。
	（教育実践記録等） 1.『聖なるも	共	平成 24	京都大	pp.73-	共同研究の 2 年間の成果をまと

	ののマッピング：宗教からみた地域像の再構築に向けて』		年3月	学地域研究統合情報センター、片岡樹編	76（全88頁）	めた報告書である。藤原は「マリア信仰をめぐる動態の時空間マッピング：地中海マルタを事例として」と題し、マリア信仰の複数の系譜とその意味を読み解く方法としてのマッピングの有効性について論じた。
世界の食文化	（教育実践記録等） 1.「スープは冷めてパンは固くなる：映画/ドラマにおける食と時間のデザイン」	単	平成5年3月	『甲子園大学紀要』	第50号：33-37	本論文では、映画/ドラマの作中を流れる時間について、食事の場面に注目しながら考察し、映画を生産する監督、出演者、そして食を演出するフードスペシャリストの意図の分析を試みた。また、フードスペシャリストに求められるのは、栄養学や食に対する体系的な知識とともに、言語・非言語によるコミュニケーション能力や交渉術といったソフトスキルの高さである点を指摘した。
キャリアデザインI	（著書） 1.『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』	共編著	平成22月10月	御茶ノ水書房、鈴木七美、藤原久仁子、岩佐光広共編	pp. 149-161, pp. 179-180（全188頁）	応募者は「巡る：岡山県井原市『嫁いらず』観音院に託する高齢者の想い」と題し、終末期を構想する高齢者とその周囲の人びととのアフターライフデザインの協働作業について考察を行った。共著者は全10名である（第1章 鈴木七美、第2章 寺崎弘昭、第3章 白水浩信ほか）。 （執筆担当部分：第10章「巡る：岡山県井原市『嫁いらず』観音院に託する高齢者の想い』（pp. 149-161）および「あとがき」（pp. 179-180）
	（教育実践記録等） 1.『ライフデザインと福祉（well-being）の人類学：多機能空間の持続的活用に関する研究』	共	平成21年3月	国立民族学博物館、鈴木七美編	全150頁	国際シンポジウムの成果をまとめた報告書であり、シンポジウムにおいて藤原は全体討論のコメンテーターを担当した。本報告書では、障害者が直面する問題や高齢者の自画像に関して出された意見をまとめ、よりよい人生を送るために我々が協働のもと取り組める課題領域に関し、考察を行った。執筆担当分：p.104-105
	2.『文部科学省特別経費事業　広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業　平成	共	平成26年3月	国立大学法人大阪大学広域アジアものづくり技	全79頁	広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業の1年間の活動をまとめた報告書である。藤原久仁子「5-4 アジア発グローバル・リーダー育成プログラムの構築に向けて：CISの課題と展望」、pp. 51-55.

様式第４号（教員個人に関する書類）

	25 年度報告書』			術・人材高度化研究センター		
	3.『文部科学省特別経費事業　広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業　平成 25 年度報告書』	共	平成 27 年 3 月	国立大学法人大阪大学広域アジアものづくり技術・人材高度化研究センター	全　97 頁	広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業の 1 年間の活動をまとめた報告書である。藤原久仁子「5-3-2 カップリング・インターンシップ（マレーシア）実施報告」、pp. 44-50、「5-4 産学連英によるアジア発グローバル・リーダー育成プログラムの構築に向けて」、pp. 75-90.
	4.『文部科学省特別経費事業　広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業　平成 27 年度報告書』	共	平成 28 年 3 月	国立大学法人大阪大学広域アジアものづくり技術・人材高度化研究センター	不明	広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業の 1 年間の活動をまとめた報告書である。藤原久仁子「5-3-8 カップリング・インターンシップ（マレーシア）実施報告」pp. 79-85、「5-4 多様な知の“協奏”と“共創”によるアジア発グローバル・リーダー育成プログラムの構築に向けて」pp. 85-106.
	5.『文部科学省特別経費事業　広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業　平成 28 年度報告書』	共	平成 29 年 3 月	国立大学法人大阪大学広域アジアものづくり技術・人材高度化研究センター	不明	広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業の 1 年間の活動をまとめた報告書である。藤原久仁子「産学共創によるグローバル人材育成プログラムの構築」pp. 78-87.
	6.『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ:ケアが照らし出すエイジン・イン・ンプレイスへ』	共	平成 30 年 3 月	国立民族学博物館、鈴木七美編	pp.145-155（全 158 頁）	藤原久仁子「人形供養と『福』贈り：人とモノのエイジング・イン・プレイスをめぐって」

研究業績

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	著書は総ページ数、学術論文等は巻、	概　　要

様式第４号（教員個人に関する書類）

				号、ページ	
著書 1. 『「聖女」信仰の成立と「語り」に関する人類学的研究』	単	平成16年2月	すずさわ書店	444頁	「マリア出現」を体験した女性が聖なる女性として人々の崇敬を集め、彼女を取り巻く新たな宗教集団が成立するとともに、「伝説の地」が観光地化する重層的な変化のプロセスを、地中海マルタを事例に取り上げ論じた。その際、「語り」の意味作用という視点から体験者のナラティヴ・アナリシスを行い、現実の出来事と語りの二つのレベルにおける物語の構築とその関連性について考察した。
2.『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』	共	平成22年10月	御茶ノ水書房、鈴木七美、藤原久仁子、岩佐光広共編	188頁	応募者は「巡る：岡山県井原市『嫁いらず』観音院に託する高齢者の想い」と題し、終末期を構想する高齢者とその周囲の人びととのアフターライフデザインの協働作業について考察を行った。共著者は全10名である（第1章 鈴木七美、第2章 寺崎弘昭、第3章 白水浩信ほか）。 （執筆担当部分：第10章「巡る：岡山県井原市『嫁いらず』観音院に託する高齢者の想い』（pp. 149 -161）および「あとがき」（pp. 179- 180）
3.『文化人類学［カレッジ版］』	共	平成 23年11月	医学書院、波平恵美子編	226頁	医療看護学や文化人類学を専攻する学生のために作成した教科書であり、『系統看護学講座　文化人類学』も別版として医学書院から出版されている。「人間と文化」、「文化人類学と質的研究」、「個人とコミュニティ」、「健康・病気・医療」「人間と死」などのテーマを取り上げ、文化の多義性や健康観を含む認識の多様性について医療人類学的視点から論じた。執筆者は波平恵美子、小田博志、仲川裕里、浜本まり子、藤原久仁子、道信良子の全6名である。（執筆担当部分：第５章「宗教と世界観」pp. 130-155）。

様式第４号（教員個人に関する書類）

学術論文 （査読付論文） 1.「守護聖人祭における演劇的パフォーマンス： Każin tal-Banda の活動を通して」（修士論文）	単	平成 8 年 3 月	お茶の水女子大学人文科学研究科	129 頁	教会主導で進められる festa ta' ġewwa と民衆主導の festa ta' barra を切り口に、信徒組織 Każin tal-Banda の活動を検討し、国民党と労働党、村と村、都市部と農村部などの二項対立とどのような重層的な関係にあるかを論じることを通じて、南ヨーロッパの小国マルタの地域性を明らかにしようと試みた。
2.「聖人信仰と社会集団関係考：マルタ南部村アーシャを事例に」	単	平成 9 年 5 月	『地中海学研究』、地中海学会	第 20 号：153－173	アーシャ村における聖人信仰と社会集団の関係を考察した論文であり、1 年 1 ヶ月間のフィールドワークで得られた調査データに基づく記述で構成されている。
3.「『マリア出現』をめぐる出来事に関する人類学的研究：巡礼地・『聖女』・宗教集団の誕生と『語り』の作用」（博士論文）	単	平成 13 年 3 月	お茶の水女子大学	274 頁	マリア出現を契機とする巡礼地/観光地がマルタに成立するプロセスについて、マリア出現の体験者の「語り」が持つ構築的な力の観点から論じた。「語り」を通じていかに新たな自己や人びとの関係性、信仰の場としての空間（巡礼地）が現実の世界で構築されるかについて、語りのレベルと現実のレベルに分け、二元的世界を接合させる実践として「語り」を論じ、社会構築主義や言語行為論の一元的な捉え方に対する批判的検討を行った。
4.「『奇跡』の物象化：マルタにおけるマリア崇敬と巡礼地の現在」	単	平成 15 年 6 月	『宗教と社会』「宗教と社会」学会	第 9 号：67-90	巡礼地という様々な人が参集する場において、物（巡礼グッズ）が癒しの「奇跡」を物象化した媒体として機能すると同時に、異なる巡礼対象の宣伝媒体としても機能する点を指摘した。
5.「オーセンティシティの多様化論再考：秋田のカトリック巡礼地『聖体奉仕会』を事例に」	単	平成 21 年 3 月	『コンフリクトの人文学』大阪大学出版会	第 1 号：135-161	巡礼地において、多様なオーセンティシティが追求されたとしても、必ずしも意味のせめぎ合いや葛藤が起こるわけではないことを、秋田のカトリック修道院の事例を通じて示した。
6.「巡礼地はどこにあるか：サイバーグレース時代における聖の場所性をめぐって」	単	平成 21 年 6 月	『宗教と社会』「宗教と社会」学会	第 15 号：23-41	日常/非日常を往還する行為として捉えられてきた巡礼に対し、マルタにおける感謝巡礼を事例に取り上げ、聖は日常の中に主観的に立ち現われては消えていくことを主張した。
7. “Rethinking Successful Aging: From the Perspective of Jizō with the Replaceable Heads”	単	平成 24 年 9 月	*Anthropology & Aging Quarterly*	33(3): 104-111.	品川の願行寺の「縛り地蔵」に対する高齢者の信仰実践を取り上げ、「サクセスフル・エイジング」研究における自立的個人の反モデル化として、高齢者イメージを再構築する必要性を論じた。

8. “Customizing Places: Pilgrimage Sites, Holy Statues and the Moment of Connectedness in Contemporary Malta”	単	平成 25 年 1 月	*The Anthropology of Europe as Seen from Japan*, National Museum of Ethnology, Akiko Mori (ed.)	81: 169-181	つながりやきずな（日本）、ソシアビリテ（フランス）、the social（英語圏）であらわされる関係性について、「ネット巡礼」と物理的な移動をともなう巡礼を対比しながら、人々がつながりを感じる場所の所在を論じた。
9. “Coping with Anxiety in a Long-living Society: Elderly Japanese Pilgrims and Their Life Design for *Living Happily Ever After*”	単	平成 25 年 2 月	*The Anthropology of Aging and Well-being*, National Museum of Ethnology, Nanami Suzuki (ed.)	80:109-122	岡山県井原市にある「嫁いらず観音院」への巡礼を事例に、少子高齢化が進む日本のぽっくり信仰に基づく諸実践を取り上げ、多世代が交流し、互いをケアすることで構築される幸せ happiness/well-being や今後の福祉の方向性について論じた。
10. 「現代カトリックにおける『邪悪なもの』の再定位：悪魔の領域としての邪視・占い・ニューエイジ」	単	平成 26 年 3 月	『キリスト教文明とナショナリズム：人類学的研究』杉本良男編、風響社	pp. 109-124.	現代カトリック文化圏における悪魔祓い（エクソシズム）の位置づけと意味の変化について、精神医学と宗教学の解釈を示した上で、本論文では特に地中海地域の文脈に照らしながら、「悪」の対象の転換により信徒の希望が創出され、信者数の増大を生み出している可能性を論じた。
11. “Anxiety, Hope, and Enterprising Spirit: Refugees Arriving in Malta Via the Mediterranean Route”	単	令和 5 年 3 月	*ORIENT*	vol.58:29-36	共生社会の実現という理想と現実の間について、マルタの難民の「記憶」の再編を手掛かりとしながら、Co-Designing という概念を導入して論じた。
（査読無論文） 12. 「多義的言説の運用と置換：マルタの守護聖人祭を事例に」	単	平成 10 年 2 月	『OCHANOMIZU ANTHROPOLOGY』お茶の水女子大学文化人類学研究室	第 2 号：81 ー 100	祝祭時に発せられる冗談や罵声、冒涜語の分析を行い、日常の規範と祝祭時の逸脱規範の相同性について論じた。
13. 「＜語り＞のアンタンシテ：マルタ島の Wied tal-Girgenti におけるマリア出	単	平成 10 年 3 月	『人間文化研究年報』お茶の水女子大学人間文化研究科	第 21 号：196-204	「マリア出現」を体験した女性の「語り」を言語行為論の視点から考察した。

現」					
14. “Becoming a ‘Saint’: The Case Study of the Apparition of the Virgin Mary at Girgenti in Southern Malta”	単	平成 13 年 1 月	『山梨学院大学一般教育部論集』山梨学院大学	第 23 号：190-204	「マリア出現」を体験した女性が、メッセージの伝達者からカリスマを備えたヒーラー（治癒師）に変容していく過程を考察した。
15. 「同調する空間：イタリアのサン・ダミアーノ巡礼地に関する人類学的考察」	単	平成 15 年 1 月	『山梨学院大学一般教育部論集』山梨学院大学	第 25 号：145-167	巡礼地を訪れる人々の増加現象を取り上げ、現代における個人主義の一つの立ち現われ方として、巡礼団（集団）に属する個人の活動を記述した。
16. 「『聖女』の身体：「マリア出現」の体験者に関する一考察」	単	平成 16 年 1 月	『多民族社会における宗教と文化』宮城学院女子大学キリスト教文化研究所	第 7 号：1-20	カトリックには聖人認定制度があり、聖人研究においては典礼暦に記載された聖人が主な対象となってきた。本稿では、称号を得る前の「聖なる人」を分析の射程におさめるための方法論を、「身体」を手がかりに探った。キリスト教文化研究所における研究発表に基づく。
17. 「『巡礼地化』する島：観光事業と信仰/実践のあいだ」	単	平成 17 年 3 月	『キリスト教と文化』関東学院大学キリスト教文化研究所	第 3 号：79-87	1970 年以降、神津島はカトリックの巡礼地/観光地として知られるようになり、韓国からも巡礼団が訪れるようになった。国内外からの巡礼団や観光客の訪問という状況に対し、地域社会の人々はどのような対応を見せているのか、行政側とカトリック信者と一般の人々に分けて分析を行った。
18. 「カトリック世界における『宗教復興』：聖体礼拝 *adorazzjoni* の今日的展開について」	単	平成 17 年 9 月	『現代宗教 2005』東京堂出版	pp. 130-149（全 343 頁）	現代世界における宗教復興現象について、各地域研究者が分担執筆した。藤原はカトリック社会における宗教復興現象について、聖体礼拝の在り方の変化に着目しながら「複数の宗教復興」について論じた。執筆者は島薗進他 17 名である。
19.「『ファンダメンタリスティック』という選択：カトリック世界における名づけと名乗りと生き方のポリティクス」	単	平成 22 年 11 月	『シリーズ来たるべき人類学　第 3 巻　宗教の人類学』石井美保・花渕馨也・吉田匡興編、春風社	pp. 97-125（全 273 頁）	ムゼウムというマルタの宗教団体を事例に、彼らをめぐる名付けと名乗りに着目し、カトリック世界を対象にしたファンダメンタリズム研究と現地概念の齟齬を明らかにし、従来のファンダメンタリズム/原理主義研究に対する批判的検討を行った。執筆者は石井三保他 8 名である。
20. 「主体化をめぐる複数の回路とトランスカルチュレーション：マル	単	平成 23 年 3 月	『コンタクト・ゾーン』京都大学人文科学研究所人文学国	第 4 号：44-59	生政治や福祉国家の文脈で言及されることの多い司祭者権力であるが、本論文では、マルタにおける告解を事例に、従順な隷属主体とは必ずしもいえない、複数の主体形成が告解を通じて行われている

タにおける告解の事例から」			際研究センター		こと、そして、それらの主体が及ぼすカトリック教義のトランスカルチュレーションについて論じた。
21. 「自己をめぐるコンフリクト論再考：モノ/者としての地蔵の身体性を手がかりに」	単	平成 24 年 3 月	『叢書　コンフリクトの人文学第 1 巻　コンフリクトから問う：その方法論的検討』小泉潤二・栗本英世監修、富山一郎・田沼幸子編、大阪大学出版会	pp. 17-32（全 196 頁	人間が身体を持つように地蔵は石像という「身体」を持ち、人間との関係の中である特定の行為を要請するモノ/者として認識される。品川の願行寺の「縛り地蔵」の場合、信者は地蔵の首を取り外しそれを自宅に持ち帰ることができる。本論文では、聖なるモノと人間のアイデンティティの揺れ、及び自己の人生を託するモノ/者から見えてくる認識のあり様の変化について論じた。
22. 「変奏される伝説、転置するフェティッシュ：奇跡をめぐる欲望が生み出す人・モノ・場所」	単	平成 26 年 2 月	『フェティシズム研究 2　越境するモノ』田中雅一編、京都大学学術出版会	pp. 155-180（全 493 頁）	本論文では、人と聖なるモノと奇跡に対する欲望の関係が「強い」からこそ、モノにまつわる伝説が反復的に変奏されること、そのモノが本物か偽物かをめぐる真正性の議論とは別の次元で、モノに関連した人や場所の聖性が生み出される点を論じた。
23.「『ランペドゥーサの悲劇』後の苦難」	単	平成 31 年 3 月	『トラウマを共有する』田中雅一・松嶋健編、京都大学学術出版会	pp. 403-411（全 589 頁）	地中海ルートでマルタに辿り着いた難民申請者とその「苦難」と「不安」の意味の二重性について、緊急事態が常態化する日常と受け入れ団体（カトリック修道院）の思いとのすれ違いに着目し論じた。
24. 「聖像も外出禁止：ロックダウン下におけるマルタ島カトリックの新たな日常」	単	令和 4 年 3 月	赤堀雅幸編『イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち』上智大学イスラーム研究センター	pp. 77-95（全 109 頁）	連続講演会「イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学」（令和 2 年 12 月）におけるオンライン発表の内容に、コロナワクチン接種の開始や教会再開後の社会変化を合わせて報告した。
25. “The Rise of New Thoughts on the Evil Eye: Unevenly Shared Knowledge and the Daily Consumption of Religious Objects in Catholic Malta”	単	令和 5 年 3 月	『甲子園大学紀要』	第 50 号：23-32	マルタの悪魔祓い師の活動の幅が広がり、これまで迷信とされてきた信仰実践が悪魔の領域への参入行為であるとの認識が信徒間に高まり、その結果、悪魔にそそのかされて邪視を持つようになった点では被害者だが、他者に害を与える点では加害者であるという新たな知識が形成されつつある点を論じた。

様式第４号（教員個人に関する書類）

26. 「スープは冷めてパンは固くなる：映画/ドラマにおける食と時間のデザイン」	単	令和 5 年 3 月	『甲子園大学紀要』	第 50 号：33-37	本論文では、映画/ドラマの作中を流れる時間について、食事の場面に注目しながら考察し、映画を生産する監督、出演者、そして食を演出するフードスペシャリストの意図の分析を試みた。また、フードスペシャリストに求められるのは、栄養学や食に対する体系的な知識とともに、言語・非言語によるコミュニケーション能力や交渉術といったソフトスキルの高さである点を指摘した。
報告書 1.『ライフデザインと福祉（well-being）の人類学：多機能空間の持続的活用に関する研究』	共	平成 21 年 3 月	国立民族学博物館、鈴木七美編	pp. 104-105（全 150 頁）	国際シンポジウムの成果をまとめた報告書であり、シンポジウムにおいて藤原は全体討論のコメンテーターを担当した。本報告書では、障害者が直面する問題や高齢者の自画像に関して出された意見をまとめ、よりよい人生を送るために我々が協働のもと取り組める課題領域に関し、考察を行った。
2.「聖なるもののマッピング：宗教からみた地域像の再構築に向けて」	単	平成 24 年 3 月	京都大学地域研究統合情報センター、片岡樹編	pp. 73-76（全 88 頁）	共同研究の 2 年間の成果をまとめた報告書である。藤原は「マリア信仰をめぐる動態の時空間マッピング：地中海マルタを事例として」と題し、マリア信仰の複数の系譜とその意味を読み解く方法としてのマッピングの有効性について論じた。
3.『文部科学省特別経費事業広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業平成 25 年度報告書』	共	平成 26 年 3 月	国立大学法人大阪大学広域アジアものづくり技術・人材高度化研究センター	pp. 51-55（全 79 頁）	広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業の 1 年間の活動をまとめた報告書である。藤原久仁子「5-4 アジア発グローバル・リーダー育成プログラムの構築に向けて：CIS の課題と展望」、pp. 51-55.
4.『文部科学省特別経費事業広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業平成 25 年度報告書』	共	平成 27 年 3 月	国立大学法人大阪大学広域アジアものづくり技術・人材高度化研究センター	pp. 44-50, 75-90（全 97 頁）	広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業の 1 年間の活動をまとめた報告書である。藤原久仁子「5-3-2 カップリング・インターンシップ（マレーシア）実施報告」、pp. 44-50、「5-4 産学連英によるアジア発グローバル・リーダー育成プログラムの構築に向けて」、pp. 75-90.
5.『文部科学省特別経費事業広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業平成 27 年度報	共	平成 28 年 3 月	国立大学法人大阪大学広域アジアものづくり技術・人材高度化研究センター	不明	広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業の 1 年間の活動をまとめた報告書である。藤原久仁子「5-3-8 カップリング・インターンシップ（マレーシア）実施報告」pp. 79-85、「5-4 多様な知の“協奏”と“共創”によるアジア発グローバル・リーダー育成プログラムの構築に向け

告書』					て」pp. 85-106.
6.『文部科学省特別経費事業広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業平成 28 年度報告書』	共	平成 29 年 3 月	国立大学法人大阪大学広域アジアものづくり技術・人材高度化研究センター	不明	広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業の 1 年間の活動をまとめた報告書である。藤原久仁子「産学共創によるグローバル人材育成プログラム
7.『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ』	共	平成 30 年 3 月	国立民族学博物館、鈴木七美編	pp. 145-155（全 158 頁）	藤原久仁子「人形供養と『福』贈り：人とモノのエイジング・イン・プレイスをめぐって」
口頭発表 1.「マリア出現をめぐる『語り』とカルト集団の形成：マルタ島 Wied tal-Girgenti の事例から」	単	平成 10 年 5 月	日本民族学会第 32 回研究大会		マルタ島ギルゲンティの「マリア出現」に関して事例報告を行った。
2.「自伝的語りと Individuality」	単	平成 11 年 5 月	日本民族学会第 33 回研究大会		指示代名詞の変化と認識・表象の関係に関する報告を行った。
3. “From Private Experience to Public Environment: On the Development of the Guza Mifsud Movement”	単	平成 11 年 6 月	CESNUR(Center for Studies on New Religions), Bryn Athyn, Penssylvania, U.S.A.		カリスマの生成に関する研究報告を行った。
4.「巡礼地の誕生と奇跡物語の変容：マルタの聖地ギルゲンティを事例に」	単	平成 14 年 6 月	「宗教と社会」学会第 10 回学術大会		巡礼地を訪れた人々の治癒の体験談を分析した。
5. 「巡礼の諸相：トレランティズムの概念規定に向けて」	単	平成 14 年 9 月	日本宗教学会第 61 回学術大会		1970 年代以降の宗教活性化現象を取り上げた。
6.「神津島における民俗とキリスト教」	単	平成 15 年 5 月	日本民族学会第 37 回研究大会		人類学における調査と記述の問題について、神津島における調査データをもとに論じた。
7.「カトリック	単	平成 16	日本文化人		「カトリック・ファンダメンタリズム」

の信仰世界とファンダメンタリズム」		年6月	類学会第 38 回研究大会		という用語について、分析概念と現地概念との齟齬を論じた。
8. “The Development of Groups within/out of Catholic Charismatic Renewal in Malta: On the Specialization and the Reorganization of a Group”	単	平成 17 年3月	The 19th World Congress of (IAHR): the International Association for the History of Religions		マルタにおけるフィールドワークをもとに、カリスマ刷新運動内における新たな集団の形成とそこからの分岐及び再編の契機について論じた。
9.「聖なるモノのある『場所』: マルタにおける願掛け Nagħmel Wegħda と感謝巡礼 Pellegrinaġġ/Żjara の調査より」	単	平成 19 年6月	日本文化人類学会第 41 回研究大会		巡礼を非日常的な聖なる空間への身体移動として通過儀礼論的立場から描いてきた人類学に対し、客観的事実としてそのような「場」が存在するのではなく、日々主観的にそれぞれ構築されることを論じた。
10. 「災因論再考 : 主客反転の構図をめぐって」	単	平成 19 年9月	日本宗教学会第 66 回学術大会		カトリックにおいては邪視信仰が悪魔祓いの教義に基づいて再編されつつあり、そのなかには被害者と加害者がこれまでと逆転する例があること、及びその含意について論じた。
11.「『忠実なカトリック教徒』の/という選択」	単	平成 20 年5月	日本文化人類学会第 42 回研究大会		フーコーのいう従順な隷属主体を生成する装置としての告解論に対し、マルタにおける多様な告解運営の事例を通じて、告解の多様な機能・運用のされ方を提示した。
12. “Religious Commodities and Narrative Creation: The Consumption of Removable Deity Heads, Card Amulets and Blessed Underclothes"	単	平成 23 年8月	Society for East Asian Anthropology, Held in Jinsudang, Chonbuk National University, South Korea		東京都品川にある願行寺の「縛り地蔵」の取り外し可能な首、岡山県井原市「嫁いらず」観音院で販売される祈祷済み下着、京都いちひめ神社で販売されるカード型お守りとその供養を巡る信仰を取り上げ、信仰者とモノ及びモノをめぐる信仰実践の関係について論じた。
13. “Designing a Coupling Internship Program for Age- Friendly Communities: In Search of New	単	平成 26 年5月	The International Union of Anthropological and Ethnological Science		NME/Commission on Aging and the Aged Panel の発表者の一人として、グローバル化と少子高齢化が同時進行する日本に必要なリーダーの条件に関して発表した。

様式第４号（教員個人に関する書類）

Standards for Global Leaders"			(IUAES)		
14.「『カップリング』手法による実践型グローバル人材育成プログラムの構築」	単	平成 28 年 1 月	文部科学省特別経費プロジェクト広域アジアものづくり技術･人材高度化拠点形成事業第 3 回シンポジウム		第 3 回シンポジウム「グローバル活動における多様な知の“協奏”と“共創”：人材の育成及び活用をめぐる各界の動き」において、異文化協働、文理協働、グローバル産学連携の 3 つの視点から海外インターンシップを整理し、発表を行った。
15. 「グローバル産学連携による人材育成プログラム（CIS）」	単	平成 28 年 9 月	平成 28 年度大阪大学ＦＤフォーラム		研修テーマ「大阪大学における大学院教育の未来を考える」の国際教育部門の代表として、グローバル・リーダシップ力の養成を担う教育に関し、海外の企業や大学と共に取り組むためのプログラム開発について発表した。
16. 「イタリア調査概説：カトリックにおける聖遺物・聖人崇敬・スーフィズム」	単	平成 29 年 7 月	スーフィズム･聖者信仰研究会		ローマを中心に巡礼地とその崇敬対象について紹介した。また、祝福や聖別等のカトリックの用語を説明し、聖なるモノにしたり解除したりする方法と、その背後の信仰体系について考察を行った。
17. 「2017 年度甲子園大学公開講座」	単	平成 30 年 3 月	子園大学地域連携推進センター		講義題目「ショパンと過ごす地中海：レクチャーコンサート♪」
18. “Holy water for Subtle Flavor in Cooking and Relationships: Dimensions of the Daily Consumption of Religious Materials in Catholic Malta”	単	平成 30 年 7 月	World Congress for Middle Eastern Studies, Sevilla, Spain		カトリックにおける聖なるモノの、信仰に基づく扱い方と日常的な使用のあり方について、フィールドデータをもとに紹介し、「商業化」、「観光化」をキーワードに分析した。
19. 「2018 年度甲子園大学公開講座」	単	平成 31 年 2 月	甲子園大学地域連携推進センター		講義題目「地中海をめぐる食と音楽の旅」
20. 「カトリックにおける聖人崇敬研究の射程」	単	平成 31 年 7 月	スーフィズム･聖者信仰研究会（上智大学）		イスラームにおける聖者信仰との比較を進めるために、恩恵、巡礼、観光、民衆信仰等のキーワードを軸に研究のレビューを行った。また、イメージ人類学の視点による最新の聖人崇敬研究について報告を行った。
21. 「イスラーム及びキリスト教における	単	令和 2 年 12 月	上智大学研究機構イスラーム研究		講義題目「聖像も外出禁止：ロックダウン下におけるマルタ島カトリックの新たな日常」（オンライン）

崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち」			センター主催連続講演会		
22.「2020 年度甲子園大学公開講座」	単	令和 3 年 2 月	甲子園大学地域連携推進センター		講義題目「地中海マルタ島の教会と聖遺物をめぐる旅」
23. “Authentic Replica and Miraculous Souvenirs: Towards a New Framework for the Study of Copied Goods”	単	令和 3 年 3 月	IUAES2020 (Online)		Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)における発表
24.「甲子園大学オープンキャンパス講座」	単	令和 3 年 9 月	甲子園大学入試センター		講義題目「おうち時間を味わう～食＋映画×世界の珈琲～」
25.「甲子園大学オープンキャンパス講座」	単	令和 4 年 2 月	甲子園大学地域連携推進センター		講義題目「南欧の冠婚葬祭と食卓を囲む人々」
26.「甲子園大学オープンキャンパス講座」	単	令和 4 年 9 月	甲子園大学地域連携推進センター		講義題目「地中海地域のお菓子の世界♪～スイーツ当てクイズ×世界の珈琲」
27.「たからの市」講座	単	令和 4 年 10 月	宝塚市立文化芸術センター		講義題目「世界のコーヒー : 地中海のカフェレストランとスローライフ」
28. “Production and onsumption of Sacred Objects in the Mediterranean Region: Trends in the Visualization of Tactile and Olfactory Sensations”（招待講演）	単	令和 5 年 4 月 5 日	一橋大学地中海研究会５０周年記念セミナー		50 周年記念セミナー“Mediterranean Island Societies in Climate Change and Globalization”における研究発表。
その他（短文・記事・翻訳等）					
1.「地中海・マルタ共和国の祝祭と音楽」（短文）	単	平成 8 年 11 月～平成 9 年 1 月まで連載	音楽雑誌『月刊ショパン』	pp.46-47 (11 月号), pp.	クラシックの演奏家を対象に、地中海音楽の一つに位置づけられるマルタ祝祭音楽の特徴に関する解説を行った。3 か月の連続寄稿である。

				48-49 (12月号). pp. 48-49 (1月号)	
2.「信仰のかたち：マルタの祝祭文化」（短文）	単	平成 9 年 7 月	ガイドブック『サビッハマルタ』	pp. 143-147	地中海マルタ島の祝祭（カーニバル、聖週間、守護聖人祭、クリスマス等）と音楽の関係について執筆した。
3.「虚構の中の要請と抵抗」（短文）	単	平成 10 年 4 月	『地中海歴史風土研究誌』、地中海歴史風土研究所	第 7 号：37-41	アウシュヴィッツ収容所内における音楽活動に関して報告した。
4.「社会的出来事の作成過程」（短文）	単	平成 10 年 10 月	『地中海歴史風土研究誌』、地中海歴史風土研究所	第 8 号：48-50	「太陽の回転」という超常現象がオカルトではなく神の顕現との関係で社会的に受容される過程について、マルタ島のギルゲンティにおける調査をもとに報告を行った。
5. 「『マリア出現』に見られる物語性」（短文）	単	平成 12 年 10 月	『地中海歴史風土研究誌』、地中海歴史風土研究所	第 12 号：32-44	聖母マリアが顕れ、メッセージを受け取ったという女性（ジュザ・ミフスッド）の発言内容の分析を行い、直接話法と間接話法における主語の変化が参集者に与えた影響について報告した。
6.「マリア信仰の史的展開と巡礼地の形成について」（短文）	単	平成 13 年 4 月	『地中海歴史風土研究誌』、地中海歴史風土研究所	第 13 号：32-44	聖母マリアが顕れたと話す人はカトリック文化圏に多くいる。しかし、その中でマリア出現地として巡礼地化するのはわずかである。本稿では巡礼地の成立要件について、言語運用論の立場から考察を行った。
7.「南ヨーロッパにおけるマリア崇敬運動」（短文）	単	平成 15 年 1 月	「国際宗教研究所ニュースレター」、国際宗教研究所	第 37 号：9-13	南ヨーロッパは聖母マリア信仰が篤く、様々な宗教集団が形成されている。本短文では、そのうち国際的組織へと急成長した複数の集団について、その活動内容を報告した。
8. 「聖母マリア」（辞書項目）	単	平成 16 年 10 月	『宗教のキーワード集』、学燈社	pp. 174-176	カトリック文化圏における聖母マリア信仰に関して解説を行った。
9. 「友達の友達」・「ファクション」（辞書項目）	単	平成 16 年 12 月	『文化人類学文献辞典』、弘文堂	p. 211, p. 825	ジェレミー・ボワセヴァンの著書に関するキーワードの解説を行った。
10. 「石原俊著『近代日本と	単	平成 20 年 12 月	『コンタクト・ゾーン』	pp. 171-	対象書は歴史学に基づく研究書であるが、文化人類学の立場から特に島という

小笠原諸島：移動民の島々と帝国』（書評）			京都大学人文科学研究所人文学国際研究センター	177	人・モノ・情報の流動性の高い地域について、外部文化との接触（コンタクト・ゾーン）の視点から掘り下げ、解説と若干のコメントを付した。
11. 「デイヴィット・チデスター『コンタクト・ゾーンにおける夢見：19世紀南アフリカのズールーの夢・幻視・宗教』」（翻訳）	単	平成 20 年 12 月	『コンタクト・ゾーン』、京都大学人文科学研究所人文学国際研究センター	pp. 1-22	文化接触による夢見の解釈の変容について、19 世紀のズールー社会を対象に論じた論文の翻訳を行った。
12. 「巡礼と場所」（辞書項目）	単	平成 21 年 1 月	『文化人類学事典』、日本文化人類学会編、丸善	pp. 414-415	辞書項目「巡礼と場所」について記述した。
13. 「告解制度を再考する：マルタの週末の風景から」（短文）	単	平成 21 年 12 月	『民博通信』、国立民族学博物館	pp. 8-9	司祭と信徒の間の匿名性が保たれず、司祭の秘匿義務も保たれていない状況について、マルタにおける調査をもとに報告し、別居や離婚に対するカウンセリング機能としての告解について報告を行った。
14. 「フェティシズム」（辞書項目）	単	平成 22 年 10 月	『宗教学事典』宗教学事典編纂委員会編、丸善	pp. 306-307	辞書項目「フェティシズム」について記述した。
15.「『ディアスポラから世界を読む』（書評）	単	平成 23 年 3 月	『コンフリクトの人文学』大阪大学出版会	pp. 288-290	ユダヤのディアスポラ研究をまとめた文献について、国境、国家、トランスナショナリティを分析の糸口としながら「ディアスポラ」という概念を使い続けることの意義についてコメントを付した。
16. 「旅紀行：地中海マルタの“ひと”と猫」（短文）	単	平成 24 年 9 月	『京都大学地域研究統合情報センター・ニューズレター』11 号	p. 12	時空間マッピングに関する共同研究の成果として、マッピングされない「ひと」と「猫」の無計画な移動をもとに、予測不可能な行動を定量的に示すことの現段階での限界と打破の可能性について論じた。」
17. 「南ヨーロッパの宗教」（辞書項目）	単	平成 24 年 11 月	山折哲雄監修『宗教の事典』、朝倉書店	pp. 229-231	南ヨーロッパのカトリック文化圏の宗教集団に関して記述した。
18. 「南欧の宗教状況」（辞書項目）	単	平成 24 年 12 月	井上順孝編『世界宗教百科事典』丸善	pp. 606-607	南ヨーロッパのカトリック文化圏の宗教動向に関して記述した。
19. 「苦しみと	単	平成 25	京都大学地	http:/	恩恵のマリア教区教会、タルヘルバの聖

様式第４号（教員個人に関する書類）

幸せの奉納品 Ex-Voto: マルタの油絵を読む」（短文）		年2月	域研究統合情報センター図書室ホームページ	/www.cias.kyoto-u.ac.jp/library/	マリア教会、タルフラースの聖マリア教会に収められた約 600 点の奉納品（ex-votos）を、①航海、②病気、③怪我に関するものに分類し、その特徴について解説を行った。苦しみと幸せの間で揺れ動く人々の日常を、聖なる場所に納められた俗なるモノの分布から読みとく試みとして、奉納品マッピングの有効性を述べた。
20. 「博物館におけるモノの展示と時空間マッピング」（短文）	単	平成 25 年4月	小島敬裕･増原善之･小林知編『宗教と地域の時空間マッピング･ニューズレター』6号	pp. 19-22	本稿では、時空間マッピングに関する共同研究の最終成果として、マルタ島の教会、聖堂、修道院の場所のマッピングをおこなった。聖人崇敬に関する地域的な特性を浮き彫りにするためには、対象者会の規模や信徒の人数、移動の容易さ等さまざまな要因を考慮に入れる必要がある点を述べた。
21. 「フェロメーナ・キート『ファッション、フェティッシュ、ファケーレ』」（翻訳）	単	平成 29 年6月	田中雅一編『フェティシズム研究第 3 巻 侵犯する身体』京都大学学術出版会	pp.249-274	フェティシズムは、日本では性的フェティシズムと宗教的フェティシズムの二つの視点から論じられることが多い。フェティッシュとしてのファッションを取り上げ、制作することの意味を問う本論文について、フェティシズムとフェティッシュの概念の刷新に資することを念頭に翻訳を行った。
22. 「渡部奈々著『アルゼンチンカトリック教会の変容：国家宗教から公共宗教へ』」（書評）	単	令和元年6月	『宗教と社会』「宗教と社会」学会	第 25 号：208-212	アルゼンチンのカトリック教会の変容に関する文献の書評を行い、学術的に確立した用語を使用する一方で新たに分析概念を導入しようとする場合には、定義の一貫性や具体性を先行研究との関わりと自分のフィールドの双方から得る必要がある点について述べた。
（社会的業績） 日本学術振興会科研費等審査委員候補者データベース登録者	単	平成 27 年 4 月から現在			
（助成金等） 文部省国際交流制度派遣留学生奨学金	単	平成 6 年4月	（金額） 往復旅費の実費＋110 万円		マルタ大学への留学費用
公益信託澁澤民族学振興基金「研究活動助成」	単	平成 15 年	50 万円		調査研究費用
科学研究費補助金「研究成果公開促進費」	単	平成 15 年	210 万円		博士論文の出版費用

様式第４号（教員個人に関する書類）

科学研究費補助金「特別研究員（PD)奨励費」	単	平成 16 年 4 月から平成 19 年 3 月	340 万円		調査研究費用 「カトリック・ファンダメンタリズムとマリア崇敬運動に関する人類学的研究」
科学研究費補助金「若手研究（B）」	単	平成 20 年 4 月から平成 23 年 3 月	403 万円		調査研究費用 「南ヨーロッパにおけるエヴァンジェリカルとカトリック・ファンダメンタリズムの展開」
大阪大学 GCOE プロジェクト費（学内競争的資金）	単	平成 20 年 4 月から平成 24 年 3 月	240 万円		研究プロジェクトの運営費用 「地中海地域におけるトランスナショナリティに関する人文学的研究」
科学研究費補助金「基盤研究（B）」「少子高齢・多文化社会における福祉・教育空間の多機能化に関する歴史人類学的研究」	共	平成 21 年 4 月から平成 24 年 3 月	1,846 万円		連携研究者の一人として、南欧の福祉、及び、ぽっくり信仰に基づく巡礼に関するフィールドワークを行った。（研究代表者：鈴木七美教授、国立民族学博物館）
京都大学共同研究 個別ユニット研究費	単	平成 25 年 4 月から平成 27 年 3 月	70 万円		研究会、シンポジウム等開催費用 「南欧カトリシズムの変容と福祉ビジネスの展開に関する地域間比較」
科学研究費補助金「基盤研究（B）」「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究	共	平成 24 年 4 月から平成 27 年 3 月	1,001 万円		連携研究者の一人として、あらゆる人々が心地よく暮らしていけるためのコミュニティの構想をテーマに、人のウェルビーイングや他者との関係の紡ぎ方について議論した。
科学研究費補助金「基盤研究(C)」「グローバル人材育成に向けた宗教人類学的知識の活用に関する研究」	単	平成 27 年 4 月から平成 31 年 3 月	416 万円		経営学的なダイバーシティ・マネジメント論と人類学的な多文化理解のアプローチを接合するための研究を行った。
科学研究費補助金「基盤研究（B）」「地中海周辺域におけ	共	平成 28 年 4 月から平成 31 年	1,755 万円		研究分担者として、地中海マルタ及びイタリアの聖遺物崇敬の調査を担当（研究代表者：赤堀雅幸教授、上智大学）

る聖者・聖遺物崇敬の人類学的研究」		3 月			
科学研究費補助金「基盤研究（A)」「イスラームおよびキリスト教の聖者・聖遺物信仰の人類学的研究」	共	平成 31 年 4 月から令和 6 年 3 月	4,238 万円		研究分担者として、地中海マルタの聖者・聖遺物崇敬の調査研究を担当。フィリピンにおける共同調査も平成 31 年度に実施した。
科学研究費補助金「基盤研究(C)「聖なるモノをめぐる宗教実践の現代的展開 : 加工技術と廃棄法の変化への着目」	単	令和 3 年 4 月から令和 6 年 3 月	377 万円		民衆カトリシズムにおける宗教実践について、聖なるモノの生産から消費、さらに廃棄に至るプロセスの分析を行っている。
大学共同利用機関法人人間文化研究機構「機関拠点型基幹研究プロジェクト」「グローバル地中海域研究」	共	令和 4 年 4 月から令和 10 年 3 月	未確定		研究分担者として、南ヨーロッパ（イタリア・マルタ）の表象/イメージの形成過程と現代的動態を担当（研究代表者：三沢伸生教授、東洋大学）
（共同研究）「複数文化接触領域の人文学」	共同研究員	平成 18 年 4 月から平成 22 年 3 月			研究代表者」田中雅一教授、京都大学人文科学研究所
「キリスト教文明とナショナリズム : 人類学的研究」	共同研究員	平成 19 年 10 月から平成 22 年 3 月			研究代表者：杉本良男教授、国立民族学博物館
「ライフデザインと福祉(Well-being) の人類学 : 多機能空間の持続的活用に関する研究」	機関研究員	平成 20 年 4 月から平成 21 年 3 月			研究代表者：鈴木七美教授、国立民族学博物館
「ウェルビーイング(福祉)の思想とライフデザイン」	共同研究員	平成 20 年 10 月から平成 23 年 3 月			研究代表者：鈴木七美教授、国立民族学博物館

様式第４号（教員個人に関する書類）

「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究：物語からモニュメントまで」	共同研究員	平成 22 年から平成 27 年 3 月			研究代表者：田中雅一教授、京都大学人文科学研究所
「ケアと育みの人類学」	機関研究員	平成 23 年 4 月から平成 26 年 3 月			研究代表者：鈴木七美教授、国立民族学博物館